

## 一、弁証法的方法

以上で、一応『資本論』は、すべて終えることができました。

ここでもう一度『資本論』の出発点に立ち返って、『資本論』のめざしていたものが、どのように実現され、解決されたかをふり返ってみることにしましょう。

マルクスは、「あと書き」(第二版への「」)のなかで、『資本論』の弁証法は、「現存するものの肯定的理解のうち、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解を含」(①二九ページ／二八ページ)み、「本質上批判的であり革命的である」(同)と述べています。

資本主義的生産様式をその肯定的理解のうちに、同時に否定的理解、その必然的没落の理解を含むものとしてとらえるということは、資本主義的生産様式を肯定的・直接的なものとしてまずとらえ、ついでそのなかに対立する二つの側面を見いだし、対立する二つの側面の対立・矛盾の発展をつうじて、資本主義的生産様式が止揚され、必然的に没落するという、弁証法的発展としてとらえることを意味しています。

そこで、もう一度ヘーゲルに立ち返って「弁証法的方法」をみていくことにしましょう。

ヘーゲルは『小論理学』の最後を「絶対的理念」で締めくくっています。絶対的理念とは、絶対的真理という意味であり、客観的事物がその「真にあるべき姿」という絶対的真理に発展していくためには「弁証法的方法」(ヘーゲルの言葉では「思弁的方法」)をとるしかない、といっています。

弁証法的方法の諸モメントは、まず「直接的なものである端初」(二三八節)です。この直接的な存在としての端初は、統一体として存在していますが、「進展」(二三九節)して、「自己分割」(同)し、対立する二つのものに区別されます。区別された二つのものは対立から矛盾へという関係に進展します。そしてこの矛盾は止揚され、「異ったものが概念のうちにあるものとして定立される終結のうちへ解消される」(二四二節)のです。ここにいう「概念」とは、ヘーゲル独特の用語で「真にあるべき姿」を意味しています。つまりこの矛盾は、「真にあるべき姿」として定立される「終結」によって止揚され、解決されることになるのです。ヘーゲルが、絶対的理念として展開した「端初——進展——終結」という弁証法は、ヘーゲル哲学の三分法といわれる「即自——対自——即かつ対自」の弁証法を「真にあるべき姿」に到達する弁証法として具体化したものといえることができます。

「したがって終りは、はじめの二つのものがそのうちで観念的なものおよびモメントとして、揚棄されたものとして、すなわち同時に保存されているものとして、存在しているところの統一である」(同)。

「現にある直接的なもの」は、自己分割して内部に対立・矛盾を生みだし、その矛盾をつうじて「真にあるべき姿」という絶対的真理(「終結」)に到達するのですが、そこには対立する二つのモメントが、より高いものに統一されて保存されているのです。

この見地にたつて、第二〇講で資本主義という「現にある直接的なもの」から、社会主義・共産主義という「真にあるべき姿」に向かつての必然的な発展をみていくことにしましょう。

## 二、社会発展の根本矛盾

資本主義的生産様式の生成・発展・消滅を考えるにあたっては、資本主義的生産様式から始めるわけにはいかないという問題があります。というのも資本主義も、歴史的な一時期を占める、「特殊な」生産様式の一つにすぎないものであり、より普遍的な社会の発展法則から出発しなければならないからです。

マルクスは、資本主義的生産様式の経済学という「狭義の経済学」の研究のためには、より抽象的、より普遍的な「広義の経済学」の研究もあわせて必要だと考えました。

エンゲルスは、『反デューリング論』のなかで、マルクスの『資本論』が、資本主義的諸法則を「肯定的な側面から、つまりこれらの法則が社会の一般的な目的を促進する側面から展開し、そして、資本主義的生産様式の社会主義的批判で」（全集⑩一五五ページ／『反デューリング論』上、二二二ページ）終わると述べたのに続き、次のようにいっています。

「ブルジョア経済にたいするこの批判を完全におこなうためには、資本主義的な生産、交換、分配の形態を知っているだけでは不十分であった。この形態に先行した諸形態や、発展の遅れている国々にいまなお資本主義的な形態とやらんで存在している諸形態をも同様に、せめておおまかにでも研究し、比較しなければならなかった。このような研究と比較をあらましおこなったのは、いままでのところマルクスだけであり、したがって、ブルジョア期以前の理論経済学についてこれまでに確かめられたことは、これまたほとんどまったくマルクスの研究に負っているのである」（同一五六ページ／同二二二、二二三ページ）。

こうしたマルクスの「広義の経済学」の研究をつうじて、「経済学批判・序言」において史的唯物論が確立され、第一五講でお話したように社会発展の根本矛盾は「生産力と生産関係の矛盾」として、定式化されることになりました。

「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。……社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表现にすぎないものである所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその極端に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激にくつがえる」（全集⑩六、七ページ／『経済学批判』への序言・序説一四ページ）。

社会の発展段階を規定するのは、「社会の物質的生産諸力」、つまり生産力であり、生産力を規定するのは労働手段です。独自の資本主義的生産様式は、機械制大工業という労働手段によって規定される生産力をもつ社会です。

一定の発展段階にある社会は、その生産力に「対応する生産諸関係にはい」ります。ここに、「生産諸関係」とあるのを、「その法律的表現にすぎない」「所有諸関係」と置きかえているところに注目して下さい。第一九講で「分配諸関係と生産諸関係」とを論じたときに、生産諸関係とは、「人間がその社会的生活過程において、その社会的生活の生産において、取り結ぶ諸関係」（⑩一五三七ページ／八八五ページ）であることをみてきました。

いいかえれば、階級社会における「生産諸関係」とは、生産における搾取する側と搾取される側との人と人と

の関係であり、その階級的対立をもたらすものこそ、「生産手段の所有」という「所有諸関係」にはかならないのです。すなわち、土地や工場、機械などの生産手段を所有するものは、その生産手段に労働を結合することによって、一方では搾取を実現し、他方では生産手段をもたない者をこれらの生産手段に結合させ、被搾取者に転化させるのです。

マルクスは「経済学批判・序言」の先の文章に続けて「ブルジョアの生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的というのは、個人的敵対という意味ではなく、諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味である」（全集<sup>⑩</sup>七ページ／『経済学批判への序言・序説』一六ページ）とのべて、生産諸関係が階級的敵対をもたらすことを明らかにしています。

搾取者と被搾取者との間の階級的矛盾が激化し、その矛盾が生産力の発展にとって「桎梏に転化」したとき、「社会革命の時期」がはじまります。

階級的矛盾の激化は、階級闘争を進展させ、階級支配の機関である国家を中心とする「上部構造全体」を、「あるいは、徐々にあるいは急激に」変革することになるのです。

したがって、史的唯物論における「生産力と生産関係の矛盾」とは、生産手段の分配（生産手段の所有か非所有かという分配）から生まれる生産関係としての階級的矛盾の激化が、生産力の発展に「桎梏」をもたらすという矛盾としてとらえることができます。

この「生産力と生産関係の矛盾」は、もつとも抽象的な、もつとも根本的なすべての生産様式に妥当する社会発展の根本的矛盾であり、また社会発展の根本的法則だということになるのです。

この社会の根本的発展法則が、資本主義的生産様式においてどのように展開され、資本主義的生産様式の生成

・発展・消滅となるのが問題となってくるのです。

## 三、矛盾の展開

### 「端初」——資本そのもの

資本主義から社会主義・共産主義への移行の問題を、第一九講でお話しした「端初——進展——終結」という弁証法的展開においてみてみることにしましょう。

「資本は利潤のないことを、または利潤が非常に少ないことを恐れる。相当の利潤があれば資本は勇敢になる。一〇%の利潤が確実であるならば、資本はどこにでも使われる。二〇%であれば、資本は活発になる。五〇%であれば、積極的に冒険的になる。一〇〇%であれば、人間の定めたあらゆる法律を踏みじる。三〇〇%であれば、断頭台の危険をおかしてでも資本が冒険しないような犯罪はない。騒乱と紛争とが利潤をもたらすならば、資本はその両方を鼓舞するであろう」（④一三〇二ページ／七八八ページ）。

まず資本主義的生産様式において、端初となる直接的なものといえば、それは資本そのもの、いかえれば、資本の本質そのものです。

資本の本質は、剰余価値・利潤の増大を推進的動機、規定的目的とするところにあります。使用価値と違って価値量には限度がありませんので、資本は利潤追求を無限に求めて止むことのない存在なのです。

ヘーゲルはそれを「悪無限」（『小論理学』九四節）とよんでいます。資本という悪無限は、自ら有限な存在で

あるにもかかわらず、その有限性を否定して他のものになろうとする矛盾をもっています。

悪無限とは、「有限なものを含んでいる矛盾、すなわち有限なものは或るものであるとともに、またその他者であるという矛盾を言いあらわすにとどまる」(同)のです。

こうした資本の悪無限は、利潤の増大を推進的動機とする資本そのものが、「資本主義的生産の真の制限」(⑨四二六ページ/二六〇ページ)であることを明らかにするのです。

マルクスは、「真の制限は、資本そのものである」と述べたのに続いて、「というのは、資本とその自己増殖とが、生産の出発点および終結点として、生産の動機および目的として、現われる、ということである」(同)と含蓄ある表現をしています。

つまり、利潤の生産による「自己増殖」が、資本の「生産の動機および目的」として「生産の出発点」になると同時に、それが資本にとつての「真の制限」となり、この制限が資本主義的生産様式そのものの歴史的限界を示す究極の原因となるのです。資本そのものが「端初」、現にある直接的なものとなり、ここから、資本主義的な階級対立と矛盾が「進展」として生まれてくることになるのです。

「資本主義的生産の真の制限は、資本そのものである」ということを現代的に表現するならば、「資本主義的生産の真の制限は、資本そのものの利潤第一主義にある」ということができます。

利潤第一主義のスローガンは、「大洪水よ、わが亡きあとに來たれ！」(②四六四ページ/二八五ページ)です。儲かりさえすれば、あとは野となれ山となれなのです。二〇〇五年一二月に問題となった耐震強度の偽装問題はその典型となるものでした。儲かりさえすれば、売却したマンション住民の生命、財産など知ったことではないとの論理が丸見えになる事件でした。

地球温暖化、エネルギー資源の浪費と枯渇、有害な産業廃棄物の大量投棄などをめぐって、いまや人類の存亡にかかわる地球環境破壊問題が生じています。その根本には「大洪水よ、わが亡きあとに來たれ！」という資本そのものの制限があります。

利潤第一主義の資本主義は、その資本の本質からして永続的に発展することのできない経済体制です。一九八〇年代から、国連のなかで「持続可能な開発」という用語が多用されはじめました。これは、経済成長と環境の保全とを統一する概念として持ち出されてきたものです。間接的な表現ではありますが、資本主義的開発への批判を込めた用語であり、資本主義的な持続可能な開発を持続可能な開発に変えようというのが、二一世紀の国連の大きなテーマの一つとなっています。

二〇〇二年に出版された、船井幸雄著『断末魔の資本主義』(徳間書房)という著作があります。船井氏は経営コンサルタントで名を馳せた、いわば資本主義の申し子とでもいべき実務家です。船井氏は、世界中の経営者、学者などと交流するなかで、「資本主義は根元的に矛盾をもった社会制度であり、永続は不可能である。発展すればするほど、制度として行き詰まるだろうし、近未来には、必ず社会制度上の大変革が必要だろう」(前掲書一四、一五ページ)と、すべての有識者が認識していると語っています。

いわば、資本主義の本質を知りぬいている体制側の人ほど、資本主義が資本の本質からしてさまざまな矛盾を生みだし、永続不可能であることを知っているのです。船井氏の言うところを聞いてみましょう。

「資本主義を維持するためには、常に拡大が必要です。新市場が常に必要になります。また、名目ではあっても、『金銭』が『モア・アンド・モア』で動かなければ国も会社も、すぐに維持できなくなります。新市場というのは有限ですから、必ず限界がきます。……物的な『モア・アンド・モア』を追求すると、有限な地球資源を

浪費し、環境を破壊するようになります」(同四三、四四ページ)。

利潤第一主義の資本主義は、より多くの利潤を求めて、「モア・アンド・モア」を追求する経済体制なのですが、無限に右肩上がりの成長を求めることは、有限な市場や地球資源と矛盾せざるをえません。船井氏がこの資本の悪無限に資本主義の永続不可能性をみているのは、『資本論』の論理が現代資本主義の真髄をもとらえていることを証明するものといつてよいでしょう。

それでは、この端初としての「資本そのもの」のもつ制限が、どんな資本主義的矛盾と階級間の対立・矛盾を生みだしていくのか、その「進展」をみていくことにしましょう。

### 「進展」①——資本主義の基本矛盾

資本主義的生産様式の基本矛盾を定式化し、社会主義・共産主義への移行の必然性を解明したものととして、エンゲルスの『反デュリング論』と、その一部から編集された『空想から科学へ』(全集⑩)があります。いずれも科学的社会主義の古典中の古典と評されているものです。エンゲルスは、『反デュリング論』「三つの版の序文」(全集⑩九ページ)、『反デュリング論』上、一八ページ)のなかで、マルクスとの関係を次のように述べています。

「この書物で展開されている考え方は、大部分マルクスによって基礎づけられ発展させられたものであって、私のあずかるところはごくわずかな部分にすぎないのであるから、私が彼に黙ってこういう叙述をしないということは、われわれのあいだでは自明のことであった。私は印刷するまえに原稿を全部彼に読みかかせた」(同)。

『空想から科学へ』でのエンゲルスの論理の展開は、次のようにすすめられていきます。まず、「資本主義的

生産以前」には、「労働する者が自分の生産手段を私有することに基礎をおく小経営が、ひろく存在していた」(全集⑩二〇八ページ)、『空想から科学へ』六四ページ)、そこでは、「個人的生産者は、自分のものである原料、しばしば自分で生産した原料で、自分の労働手段を使って、自分またはその家族の手労働でそれを生産した」(同二〇九ページ/同六七ページ)。生産物の所有は、「おのずから彼のもの」(同)であった。つまり小経営は「個人的生産と個人的取得」という生産様式だったので。

利潤第一主義の資本主義的生産様式の発展は、単純協業、マニユファクチュアを経て、資本主義的生産の独自の生産様式である機械制大工業をもたらした。生産力は飛躍的な発展をとげます。「生産手段と生産とは本質的に社会的なものになった」(同二〇ページ/同六八ページ)にもかかわらず、「個々人の私的生産を前提とする取得形態、したがって、各人が自分自身の生産物を所有し、それを市場にもちこむ場合の取得形態に従わせられる。生産様式は、このような取得形態の前提を廃止するにもかかわらず、この取得形態に従わせられるのである。この矛盾が新しい生産様式にその資本主義的性格をあたえるのであるが、この矛盾のうちに現代の衝突の全体がすでに萌芽としてふくまれている」(同)のであり、この矛盾が、「社会的生産と資本主義的取得」(同)の矛盾としてとらえられているのです。これは、史的唯物論でとらえられた「生産力と生産関係の矛盾」という社会発展の根本矛盾の、資本主義的展開ということができます。

利潤第一主義の「資本そのもの」が、一面では、生産力と生産手段を進展させて、「社会的生産」をもたらしながら、他面では、「社会的生産」に対応しない「資本主義的取得」をもたらすという、「自己分割」をするに至ったのです。

こうして、「資本そのもの」という「端初」は、「社会的生産と資本主義的取得」という「資本主義の基本矛盾

盾」へと「進展」していくのです。

ここにいう「資本主義的取得」とは、第六講でお話した「商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への転換」(④九九三ページ／六〇五ページ)における「資本主義的取得法則」を意味していることは、いうまでもありません。

この展開は、マルクスが『資本論』第一部のまとめ(第七講)として展開している論理とほぼ同じです。すなわち、前資本主義的な小経営では、「労働者が自分の生産手段を私的に所有」(④一三〇三ページ／七八九ページ)することによって、労働生産物を私的に所有していました。しかし資本主義的生産様式のもとで、「自分の労働によって得た、いわば個々独立の労働個人とその労働諸条件との癒合にもとづく私的所有」(④一三〇四ページ／七九〇ページ)は、「形式的には自由な労働の搾取にもとづく資本主義的私的所有によって駆逐される」(④一三〇四、一三〇五ページ／同)こととなります。

「資本主義的生産様式が自分の足で立つことになれば、ここに、労働のいつその社会化、および、土地その他の生産手段の社会的に利用される生産手段したがって共同的生産手段へのいつその転化、それゆえ私的所有者のいつその収奪が、新しい形態をとる。いまや収奪されるべきものは、もはや自営的労働者ではなく、多くの労働者を搾取する資本家である」(④一三〇五ページ／同)。

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、それゆえ資本主義的な私的所有は、自分の労働にもとづく個人的な私的所有の最初の否定である。しかし、資本主義的生産は、自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生みだす。これは否定の否定である」(④一三〇六ページ／七九一ページ)。

要約すると、小経営では、個人的生産にもとづく個人的取得であった、しかし資本主義的生産様式のもとで、

小経営における個人的生産は、「労働のいつその社会化および土地その他の生産手段の社会的に利用される生産手段」に転化し、生産は社会的になったが、他方取得の方は依然として、個人的、資本主義的取得のままにとどまっている、この矛盾が資本主義的生産「自身の否定を生みだす」というものです。

エンゲルスの定式化した「社会的生産と資本主義的取得の矛盾」という形式そのものは、『資本論』にみることはできませんし、そこにエンゲルスの工夫が生かされてもいるのですが、その内容は、『資本論』のいま述べた箇所にあらわれているということができます。

このエンゲルスの定式化は、先に述べたように史的唯物論における「生産力と生産関係の矛盾」という社会発展の根本矛盾を、資本主義的生産様式にふさわしく展開したものとみることができます。利潤第一主義という独自の資本主義的生産様式のもとで、「生産力」そのものは巨大な発展をとげ、生産力と生産手段は社会的となり「社会的生産」とよぶにふさわしいものに転化したにもかかわらず、他方で資本家が生産手段を私的に所有し、生産物と利潤とを独り占めにする個人的・資本主義的取得により、資本家と労働者の階級対立を生みだす「生産関係」にとどまっていることを、「社会的生産と資本主義的取得の矛盾」としてとらえたのです。このエンゲルスの定式化により、資本主義的生産様式における階級間の対立・矛盾の基本原因が明らかにされることになったのです。

不破氏は、『エンゲルスと「資本論」』(上、二六〇ページ、新日本出版社)のなかで、次のように述べています。

「エンゲルスの『反デュリング論』は、マルクスの『資本論』の根本思想を広範な人びとにわかりやすく説明することを、大きなねらいの一つとしていましたが、『社会的生産と資本主義的取得との矛盾』というこの定式も、マルクスが『資本論』で浮き彫りにした資本主義の根本矛盾——『資本主義的な外被』の爆破に社会を必

然的にみちびいてゆくこの矛盾を、簡潔明瞭に表現しようとして、エンゲルスが工夫したものでした。……この定式は、資本主義の矛盾にみちた運動を多面的にとらえるうえでも、また資本主義のその後の発展の諸段階を正確に特徴づけるうえでも、たいへんな有効な定式となり、『資本論』の威力を大幅に増強したともいえる力を發揮しました」（同）。

さらに不破氏は、マルクスの「経済学批判・序言」における「生産諸力の発展と既存の生産諸関係との矛盾」にもふれつつ、「エンゲルスの定式化は、この点でも、『資本論』の分析と史的唯物論の基本見地との関係を、たいへん見通しのよいわかりやすいかたちで、とらえられるようにした」（同二六二ページ）と述べ、「エンゲルスの『資本論』への貢献を論じるとき、資本主義の基本的矛盾の定式化の問題は、絶対に見落としてはならない論点となると思います」（同二六二ページ）と、結んでいます。

### 「進展」②——基本矛盾の展開

もうひとつ、エンゲルスの定式化でつけ加えておきたいことは、「この矛盾のうちに現代の衝突の全体がすでに萌芽としてふくまれている」（全集①二二〇ページ／『空想から科学へ』六八ページ）としてのことです。

エンゲルスは、「社会的生産と資本主義的取得との矛盾」を資本主義的生産様式における基本矛盾ととらえ、この基本矛盾のなかに資本主義的生産諸関係から生まれる「現代の衝突の全体」、つまり、資本主義的生産様式のもとにおける階級間の「衝突の全体」が萌芽として含まれていて、この階級間の矛盾が様々な形態において展開されることを明らかにしたのです。

以下『資本論』にそって、この基本矛盾の展開を検討してみることにしませう。第一五講で、一般的利潤率の傾向的低下の法則が資本主義的諸矛盾を展開させ、これらの諸矛盾は「生産力と生産関係の矛盾」に帰着することをみてきましたし、第一八講では、信用制度がマネー・ゲームによる「二一世紀型危機」を生みだしていることをみてきました。

これらをつまえて、ここで「社会的生産と資本主義的取得」という基本矛盾が、一般的利潤率の傾向的低下の法則と信用制度のもとにおいて、その現代的様相も含めてどのように資本主義的な階級矛盾として展開されていくのか、をみていくこととなります。

まず、第一に、「社会的生産と資本主義的取得の矛盾」は、第一部でとりあげた資本主義的蓄積の一般的法則として展開されることとなります。

利潤第一主義のもとで剰余価値生産のための資本の競争は、資本を蓄積へと強制して、資本の有機的構成を高めつつ社会的生産力を発展させていきます。大工業の巨大な膨張力は、それに比べると気体の膨張力を兎戯にも等しいものにかえてしまいます。

また、資本主義的蓄積は生産力をますます社会的なものへ高めながら、他方で、搾取の強化による資本主義的取得様式によって貧困を蓄積していきます。資本主義的蓄積の一般的法則は「資本の蓄積に照応する貧困の蓄積を条件づける」（④一一〇八ページ／六七五ページ）のです。

こうして、「社会的生産と資本主義的取得の矛盾」は、「資本の蓄積と貧困の蓄積の矛盾」となってあらわれまゝ。多国籍企業と国際金融大資本の支配する「グローバル資本主義」「カジノ資本主義」のもとにおいて、全世界的規模での「資本の蓄積と貧困の蓄積の矛盾」となり、しかもそれは日々拡大し、深化しつつあるのです。

第二に、第一の矛盾の上に、第二部でとりあげた「生産と消費の矛盾」という第二の矛盾が登場します。

これもまた、「社会的生産と資本主義的取得の矛盾」のあらわれといえることができます。「生産と消費の矛盾」については、これまで恐慌論などでくり返しお話ししてきましたので説明を要しないと思いますが、「資本の蓄積と貧困の蓄積の矛盾」からくる、一方で生産力の発展と他方で大衆の相対的な消費能力の制限が、利潤率低下の法則のもとで「生産と消費の矛盾」を拡大していきます。商人資本の介在と銀行信用とが「生産と消費の矛盾」を拡大することもみてきたところです。

「生産と消費の矛盾」は、恐慌という「現実的なもの」となってあらわれます。

独占資本主義段階での恐慌は、全世界的恐慌への広がりを見せると同時に、不況の長期化、慢性的不況を生みだしています。日本経済も九〇年代のバブル崩壊から、「失われた一〇年」をはるかに越える長期不況が続いています。大企業では好況感が生まれても、中小企業や個人消費の低迷は続いており、国民大衆の消費能力の制限により、いまだに景気は「踊り場」から抜け出すことができない状況となっています。

第三に、「社会的生産と資本主義的取得の矛盾」は、第三部でとりあげた「資本の過剰と労働力の過剰の矛盾」となってあらわれます。

ついに、利潤第一主義という「資本そのもの」の「真の制限」がはっきりしてきます。資本は利潤の増大を推進的動機として、生産力を発展させてきたのですが、ここにいたって利潤第一主義の資本主義的生産は、資本も労働力もともにあり余っているにもかかわらず、両者を結合して生産力を発展させることができないという「桎梏」に転化してしまつたのです。まさに、資本主義的生産諸関係が「生産諸力の発展諸形態からその桎梏に変」（全集⑩六ページ／『経済学批判への序言・序説』一四ページ）したのです。

現代の発達した資本主義諸国では、一般的利潤率低下の法則のもとで追加資本を投下しても新たな利潤を生産しえないところから、軒並みにゼロ成長かマイナス成長となっています。そこから資本は、過剰な資本を一方では軍需産業やムダな公共事業に投下し、他方でインチキ賭博のマナー・ゲームにうつつをぬかしているのです。その反面「労働力の過剰」により、労働者の失業、半失業、不安定雇用の増大、中小零細企業の倒産は深刻な事態となっているのです。

第四に、二一世紀の現代において、全世界をまたにかける多国籍企業と国際金融大資本という大独占資本は、「新自由主義」経済をかかげて、自国の労働者、国民のみならず、全世界の労働者、人民を支配し、収奪するに至っています。

いわば、ひとにぎりの国際的大独占資本対全世界の労働者、人民という対立関係において、「資本の蓄積と貧困の矛盾」「生産と消費の矛盾」「資本の過剰と労働力の過剰の矛盾」のいずれにおいても階級的矛盾は激化し、第一八講でみたような「二一世紀型危機」を生みだしているのです。「二一世紀型危機」とは、「ひと握りの国際的大独占資本榮えて、全世界の民滅ぶ」危機ということができるところでしょう。

こうして、いまや「資本所有の潜在的止揚」（⑩七六四八ページ／四五七ページ）は、顕在的に止揚されざるをえないところまでに達しているのです。

### 「終結」——社会主義・共産主義

資本主義の諸矛盾を止揚し、諸矛盾を解決する社会として、社会主義・共産主義の社会が展望されることとなります。そこでは、もはや利潤第一主義は否定され、搾取も階級もない「真にあるべき姿」が実現されると同時に、「社会的生産」は保存されることになるのです。



このように『資本論』は、商品という「萌芽」から出発しながら、「もつとも単純な現象のうちに（ブルジョア社会のこの「細胞」のうちに）、現代社会のすべての矛盾（あるいはすべての矛盾の胚芽）をあげきだ」（レーニン全集⑧三二七ページ）し、資本主義から社会主義・共産主義への移行の必然性を解明したのである。

ここに『資本論』は、「萌芽からの発展」という弁証法的論理を最初から最後まで貫徹してみせました。マルクスが、「あと書き（第二版への）」のなかで、「その合理的な姿態では、弁証法は、ブルジョアジーやその空論的代弁者たちにとっては、忌まわしいものであり、恐ろしいものである。なぜなら、この弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解を含み、……その本質上批判的であり革命的であるからである」（①二九ページ／二八ページ）と述べていることを、あらためて深く味わい、重く受けとめたいと思います。

エンゲルスの基本矛盾の定式化は、先にも述べたように資本主義的諸矛盾の解決としての社会主義・共産主義の社会とは何か、を考えるうえでも、有効な視点を提供するものとなっております。

つまり、資本主義の基本矛盾が、利潤の生産を推進的動機とすることから生まれる「社会的生産と資本主義的取得の矛盾」としてとらえられるということは、その矛盾の解決を、搾取を廃止することによる「社会的生産と社会的取得」としてとらえることになります。

マルクスは、第一部のまとめとして展開した「資本主義的蓄積の歴史的傾向」（④一三〇三ページ／七八九ページ）のなかで、小経営——資本主義的生産様式——社会主義・共産主義的生産様式という生産様式の発展を、否定の否定としてとらえていました。

それをエンゲルスの定式化をもとにして考えれば、小経営（個人的生産と個人的取得による矛盾の不存在）——

資本主義的生産様式（社会的生産と資本主義的取得の矛盾）——社会主義・共産主義的生産様式（社会的生産と社会的取得による矛盾の解決）ということになるのではないかと思われまます。

では、「社会的生産と社会的取得」を実現するにはどうしたらいいのでしょうか。

マルクスやエンゲルスが、「資本主義的取得」といつているのは、生産手段が事実上社会化されたにもかかわらず、これまでどおり個人的所有とされ、その結果生産物も個人的（資本主義的）に取得されることを意味しています。

資本家が生産物を資本主義的に取得するのは、生産手段をその個人的所有のもとにおき、社会のための生産ではなく、資本のための生産をしているからにはほかなりません。ですから「資本主義的取得」を「社会的取得」に転化し、搾取を廃止するためには、「生産手段の社会化」、つまり生産手段を社会全体が所有することが必要となってくるのです。

以下、エンゲルスが『空想から科学へ』で展開している社会主義論を紹介しておきましょう。

「社会が生産手段を取得すれば、生産にたいする現存の人為的な障害がとりのぞかれるばかりでなく、現在では生産の不可避的な随伴物となっていて恐慌のさいに頂点に達する、あの生産力と生産物との直接の浪費や破壊もなくなる。さらに、そうなれば、今日の支配階級やその政治的代表的愚かな奢侈的浪費がなくなるので、大量の生産手段と生産物が全社会のために利用できるようになる。社会の全員にたいして、物質的に完全にみちたりて日ましに豊かになってゆく生活というだけでなく、さらに彼らの肉体的および精神的素質が完全に自由に伸ばされ發揮されるように保障する生活を社会的生産によって確保する可能性、そういう可能性がいはじめて存在するようになったのである。しかし、この可能性は現に存在している」（全集⑨二二二、二二三ページ／『空

想から科学へ』九〇、九一ページ)。

社会が生産手段を掌握することによって、資本そのものが否定され、資本の本質である利潤第一主義も否定されることとなります。それは、生産手段の資本主義的取得から生まれる搾取制度を廃止し、階級の区別をなくすることを意味していますが、ある意味でそれ以上の意味もっています。すなわち「資本が社会の主人公」だった資本主義にとってかわる、「人間が社会の主人公」となる社会主義・共産主義の社会が登場するのです。

「社会が生産手段を掌握するとともに、……社会的生産内部の無政府状態に代わって、計画的、意識的な組織が現われる。個人間の生存闘争は終りを告げる……いままで人間を支配してきた、人間をとりまく生活諸条件の全範囲が、いまや人間の支配と統制に服する。人間は、自分自身の社会的結合の主人となるからこそ、またそうなることによって、いまや始めて自然の意識的な、ほんとうの主人となる」(同二三三ページ/同九一ページ)。

人間は、原始共産制社会にあつては、未発達な生産力の制限を伴いながらも、「社会的生産と社会的取得」という、本来の社会的存在である人間にふさわしい生産様式をもっていました。しかしその後の生産力の発展のなかで、私的所有が誕生し、生産手段をもつものともたないものに階級的に区別され、階級社会をつらぬく搾取制度に盲目的に支配されてきました。それはすべて、生産力の一定の発展段階に照応した、生産諸関係によって規定された無意識的な組織にすぎませんでした。

しかし、いまや搾取制度を廃止し、階級的抑圧をなくすことによって、はじめて人間は意識的に社会を組織しうる社会の主人公となるのであります。

「これまでは、人間自身の社会的行為の諸法則が、人間を支配する外的な自然法則として、人間に対立してきたが、これからは、人間が十分な専門知識をもってこれらの法則を応用し、したがって支配するようになる。こ

れまでは、人間自身の社会的結合が、自然と歴史とによって押しつけられたものとして、人間に対立してきたが、いまやそれは、人間自身の自由な行為となる」(同/同九二ページ)。

ここで、「人間自身の社会的結合が……人間自身の自由な行為となる」とあることに注目して下さい。ほんらい人間は、人間のつくった「社会」という生産と生活の場によって人間となってきた「社会的存在」としての動物です。猿は群はつくっても社会はつきりません。人間は社会をつくり、社会が人間をつくらせてきたのです。しかし資本主義的競争原理のもとで、一人ひとりバラバラにされ、相互扶助、友愛、連帯の気持ちを奪われて、アトムの存在となり、「人間自身の社会的結合」をなしえない状況となっています。

人間は社会の主人公となることによって、人間自身の主人公となり、抑圧する者も抑圧される者も存在しない、本来の人間としての共同社会性を回復するのです。

「これまで歴史を支配してきた客観的な、外来の諸力は、人間自身の統制に服する。このときからはじめて、人間は、十分に意識して自分の歴史を自分でつくるようになる。このときからはじめて、人間が作用させる社会的諸原因は、だいたいにおいて人間が望んだとおりの結果をもたらすようになり、また時とともにますますそうなるべく。これは、必然の国から自由の国への人類の飛躍である」(同二三三、二三四ページ/同)。

「ヘーゲルは、自由と必然性の関係をはじめて正しく述べた人」(全集②一八ページ/『反デューリング論』上、一六三ページ)です。すなわち、真の自由とは、自然や社会の必然性(法則性)を認識し、その必然性を真にあるべき姿にかえることによって、自然や社会を合法的に支配することにある、と考えたのです。

「動物界から分離したばかりの最初の人間は、すべての本質的な点で動物そのものと同じように不自由であった。しかし、あらゆる文化上の進歩は、どれも自由への歩みであった」(同二一九ページ/同)。

資本主義から、社会主義への移行を、「必然の国から自由の国への人類の飛躍」ととらえたことには、たいへん重い意味合いがあります。

旧ソ連や東欧の誤りがどこにあったのかは、これからも研究されるべき課題ですが、少なくとも、社会主義を「生産手段の社会化」のみに歪曲してとらえ、人間が社会と人間自身の主人公となる「自由の国」であることを理解しようとしなかったことであつたことは、間違いないところでしょう。

この点から日本共産党の新綱領が、社会主義・共産主義の社会の基本を「生産手段の社会化」プラス「国民が主人公」ととらえているのは、本来の社会主義を正確にとらえたものといえることができます。

「こういう世界解放の事業を遂行することが、近代プロレタリアートの歴史的使命である。この事業の歴史的諸条件と、したがってその本性そのものを究明し、そうすることによって、行動すべき使命をおびた今日の被抑圧階級に、彼ら自身の行動の諸条件と本性とを意識させること、これが、プロレタリア運動の理論的表現である科学的社会主義の任務である」（全集⑩二二五ページ／『空想から科学へ』九五ページ）。

二一世紀は、資本主義のもつ限界がこれまで以上に誰の目にも明らかになると同時に、社会変革の時代となることを予測させる動きも強まっています。

同じ資本主義諸国のなかにあつても、むき出しの弱肉強食の資本主義である「新自由主義」型国家独占資本主義に反対し、「人間の顔をした資本主義」をめざす「ヨーロッパ型資本主義」も生まれてきています。日本共産党の示す「ルールある資本主義」も同じ方向をめざしているといつてよいでしょう。

一九九〇年代のソ連や東欧の崩壊によつて「社会主義崩壊論」が大合唱されましたが、その熱狂が消え去つてみると、ソ連や東欧の「社会主義」は、本来の社会主義とは無縁なものであつたことも次第に明らかになつてき

ました。

同時に、「新自由主義」に反対し、人間解放という本来の社会主義をめざす動きがラテン・アメリカでも次第に現実のものとなつてきています。とくにベネズエラのチャベス政権は、九九年の政権誕生以来、アメリカの干渉・介入をはね返し、八回の国民投票のすべてに勝利して一歩ずつ社会主義に向かうという、国民が主人公の参加型民主主義による多数者革命の道を歩んでいて注目されています。

また、中国、ベトナムなどの社会主義をめざす国でも、ソ連・東欧の教訓に学んで、経済の官僚主義的統制ではなく、市場経済を取り込んだ社会主義経済の道を探求しています。エンゲルスがいうような、人間が真に社会の主人公となり、「人間が作用させる社会的諸原因は、だいたいにおいて人間が望んだとおりの結果をもたらす」ような社会主義の建設は、まだこれからの課題となっています。

このような激動の二一世紀の今日、『資本論』を学び、資本主義の本質、矛盾、その制限と当為をしつかり学んでこそ、時代を切りひらいて生きぬくことができることを、お互いに確認しあいたいと思います。長期間のご静聴ありがとうございました。